

基礎・基本の定着と社会的な思考力の向上を図る

ワークシートの活用

【三郷市教育委員会】

1 学校、学年、教科 中学校、全学年、社会科

2 ねらい

50分の授業で、基礎・基本の定着と社会的な思考力の向上を図るために、手作りワークシートを作成している。50分という限られた時間の中で、要点を押さえるだけでなく、様々な資料から社会的事象の意味・意義を解釈する学習を通じ、社会的思考・判断・表現ができる力を養うことをねらいとしている。

3 取組内容

(1) 授業規律の確立

ア チャイムと同時に授業を開始し、チャイムと同時に授業を終了する。

5分前には教室に入り、チャイムと同時に学習に入れる雰囲気をつくる。

(評価カード配布、学習内容の板書など)そして、1時間の授業で学習する内容は、必ず行い積み残しをつくらない。

イ 授業を通じ、生徒の望ましい生活習慣を育成する。

授業に遅れることや私語・居眠りは許さない毅然とした姿勢を示す。発言の際の返事や言葉遣い、身だしなみも指導する。

(2) ワークシートの工夫

ア 1時間1枚のワークシート

1時間の中で、押さえるべき内容を1ワークシートに納めるようにしている。そのために、手書きでワークシートの作成を行っている。ワードプロセッサを使用するよりも手書きの方が紙面を自在に活用した作成が容易である。手書きによる想定外の効果もある。ワードプロセッサによる活字が氾濫する今日においては、手書きの文字の方が生徒に印象づけられるようである。

イ 必要最小限の資料を掲載

社会科においては、資料の活用は欠かせない。しかし、資料集を開いたり、地図を開いたりしていると生徒の集中力が散漫になる傾向がある。そこで、図や写真等、必要最小限のものをワークシートの中に写し込むようにしている。

ウ 思考力を活性化させる問いの設定

「よく考え納得して身に付けた内容は、単純な記憶やその再生とは違って、焦点や脈絡をもった自分の言葉で表現できるものである。」(学習指導要領解説)。そこで、生徒に歴史的事実や歴史上の人物について、「どう思うか。」「どう感じるか。」等感性を働かせる問いを設定している。また、資料に対する読み取りの問いも設定している。

例 タイトル「ピラミッド」

1. つくらせた人は、なぜこんなに巨大な墓を作ったのだろうか。
2. つくった人は、どんな気持ちで建設に参加したのだろうか。



- A 喜んで参加した B できればやりたくなかった
〈理由〉

例 タイトル「実力しだいで」

(「甲州法度之次第」を提示)

1. 上の資料は、信玄が甲斐国独自につくったきまり(分国法という)である。彼は、なぜこのようなきまりをつくったのだろうか。

(A 金山 B 紙 C 堤に関する漫画を提示。)

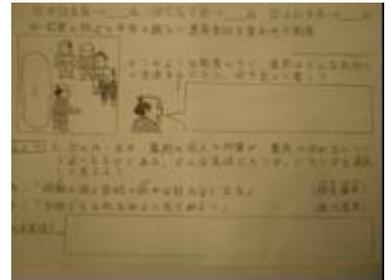
2. 上のABCは、信玄が甲斐国で取り組んだことである。彼は、甲斐国をどんな国にしたかったのだろうか。

(3) 授業展開の工夫

実際の授業では、①学習課題の把握 ②自分の考えを記入 ③書けた考えの発表 (→教師による評価: 良いところを復唱する) ④教師による補足説明 ⑤板書・まとめ の流れで進めている。

特に、生徒発表については、個々の回答を受け止め、「視点」を重視して評価をしている。答えが一つでない問いに対する友達の発言に周囲の生徒も聞き入り、納得したり反対したりする反応が見られる。

「②自分の考え記入」する段階は、多くは一人学びであるが、4人程度のグループで考えさせることもある。



(4) 自己評価表の活用

授業の終わりに、「自己評価表」を書かせている。

①月日 ②(使用した)プリント番号 ③学習内容
④チャイム着席○× ⑤授業道具○× ⑥挙手回数
⑦発表回数 ⑧集中ABC ⑨個人賞(良い視点からの発表に対して、教師が与える。)の項目に対して振り返り、授業得点として数値化するものである。



チャイム着席と道具については、○は0点、×は-1点。挙手は、3回以上で1点。発表は、1回につき+1点。集中は、Aは+1点、Bは0点、Cは-1点。個人賞は、+1点としている。これらを合計して、授業得点-3から+6の中に印を付ける。

数値化して表すことで、自ずと自分の授業態度の状態を明確に認識することができる。

4 成果と課題

社会的事象に対して、その背景について考えを巡らしたり、さまざまな社会的な立場の人に対する気持ちを推し量ったりすることで、事象に対する認識が深まっている。社会科の学習では、単に機械的な「記憶」でなく、脈絡の中で思考しているので、事象の意味・意義についても理解する力がついてきている。

自分の考えを書くことが苦手な生徒も、選択肢を用意し、自分が選択した立場について理由を記入するように働きかけることにより、次第に考えをまとめることができるようになってきた。全員が授業により積極的に参加できるよう、グループ学習の活性化やクイズ形式をもっと取り入れるなど、さらなる手だてを考えていきたい。また、教師による評価や自己評価だけでなく生徒の相互評価を生かして、生徒の思考する力の育成をさらに進めていきたい。